王羲之から顔真卿へ

富田　淳

張芝（ちょうし）

王羲之や王献之が活躍した東晋と、顔真卿らが輩出した唐は、書法が最高潮に到達しました。今回より、東晋の前後から唐にいたる能書を取りあげ、その功績や逸話をご紹介します。

最初は、王羲之が師と仰いだ後漢の張芝。

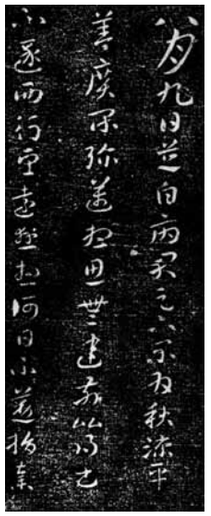
紀元前二二一年、中国を統一した秦の始皇帝は、度量衡（どりょうこう）や貨幣とともに、公式書体として篆（てん）書を制定しました。泰山刻石に見られるように、始皇帝の定めた篆書は、線の太さを均一にして、文字の組み立ては左右対称を基本とする、実に荘厳で美しい書体でした。

しかし篆書は書写に時間がかかります。西暦二五年から二二〇年まで存続した後漢になると、より早く書ける公式書体として隷書が考案され、新しい美意識のもとに、波のようなうねりを持つ波磔が盛り込まれました。篆書は象形文字の名残を留めていましたが、装飾的な筆法が加味された隷書にいたって、文字は初めて抽象的な符合となったと言うことができます。

秦の末頃には、通行書体として草書が出現していましたが、後漢になると、草書がきわめて広く流行しました。もっとも、当時の草書は隷書の筆法の影響が強い、章草とよばれるものでした。張芝の功績は、横への筆法が強調される章草に改良を加え、縦への連綿を強調する今草を創出したことにあります。

張芝は徳が高く、朝廷に召されたものの官位には就かず、生涯にわたって書の稽古に専心して、草聖と称されました。家の衣帛（しろぎぬ）は必ず書いてから練りなおし、池に臨んで書を学んだため、池の水はすっかり黒くなったといわれます。書を学ぶことを臨池というのは、張芝の故事から生まれました。

当時の人々は張芝の草書にあこがれ、公式書体を学ばず、最新の通行書体の修得に腐心する風潮を、趙壹（ちょういつ）はその著『非草書』で非難しています。



「秋涼平善帖」

張芝の名言「匆々不暇草書」は、二つの解釈が成立します。一般には芸術的な表現をめざしてゆっくり書くため「匆々として、草書するに暇あらず」（忙しいので、草書で書く暇がありません）と解釈されますが、より速く書ける今草を考案した張芝の功績を考慮すれば「匆々として暇あらず、草書す」（忙しくて暇がないので、草書で書きます）というのが本意だったのかも知れません。

残念ながら張芝の確かな書は現存しませんが、『淳化閣帖』の所収作から、張芝の字姿の変遷を推測することができます。

「今欲帰帖」

富田淳（とみたじゅん）　一九六〇年生まれ
・筑波大学大学院博士課程芸術学研究科書専攻修了
・東京国立博物館学芸企画部長。

平成三十一年度編集担当ご挨拶

○そろそろ編集の準備を始めようかと思った頃、五名のうち三名のメンバーの入れ替え。どうなることかと思っていたら、皆察知してくださったのか、抜群のチームワークになりました。吉田菁風編集長の時から綿々と続いているチームワーク。今年一年絆で頑張ります。

杉浦　華桂

○新年度の編集を担当させていただきます。読者の皆様に満足していただけるよう微力ながら最善を尽くし、チームワークで乗り切りたいと考えております。会員・役員・先生方の教示、ご支援の程よろしくお願い申し上げます。

小泉　移山

○二回目の編集になります。主に学生版を担当します。良い全書芸誌になるようがんばります。よろしくお願いします。

大久保樹心

○初めて編集を担当させて頂きます。かなの担当です。今まで何気なく手にとっていた全書芸誌が大勢の方の力と知恵の結集であることを日々実感しております。微力ながら頑張ります。よろしくお願いいたします。

原田　弘琴

○初めて編集をさせていただくことになりました。学生版の小学部を担当いたします。仕事が進むにつれて、歴史ある「全書芸」の重みを感じていますが、微力ながら頑張りたいと思っております。諸先生、会員・事務局の皆様、どうぞよろしくお願い致します。

山下　桐佳

平成三十一年三月

全日本書芸文化院

平成三十一年度編集担当（写真右から）

大久保樹心
原田　弘琴
山下　桐佳
小泉　移山
編集長　杉浦　華桂

編集後記

○四役と三編集長をまじえ、誌面の一部変更の会議をしました。上級者にも初学者にも親切で分かりやすい誌面を、という難問の下、ページを一部変更しました。いかがでしょう。読者の皆様の意見をお待ちしています。

○今冬、北と日本海側は厳しい寒さ、太平洋側はカラカラ天気と、地球の異常気象が日本にも影響を及ぼしています。紙や墨など書道は気候の変動を受けやすい物、皆さんの地域はいかがですか。

○昇段級試験の課題が発表されました。毎年のことですが、準備をしっかりやっていれば無事通過できると思います。締め切りギリギリにあわてないよう早めの準備を。

○地方各地と本部で行われる講習会、定員になり次第締め切りになっています。全書芸の先生方の生の声を聴くことができる絶好の機会です。ふるってご参加を。

（桂）

平成三十一年三月十日　印刷
平成三十一年三月十五日　発行
九〇〇円
代表　大倉谷山
編集者　杉浦華桂・小泉移山
大久保樹心・原田弘琴
山下桐佳
発行者　岩本宗
印刷　株式会社カワイ
全日本書芸文化院
東京都千代田区神田錦町一－一〇－一
振替　〇〇一五〇－七－一三五一
電話　〇三（三二九四）二五五一
FAX　〇三（三二九一）一一三八
http://www.zr-shogei.co.jp
z-shogei@minos.ocn.ne.jp